



仙台に赴任して

昨年10月より、仙台にある東北医科薬科大学医学部に皮膚科学教室の主任教授として赴任しました。東北医科薬科大学医学部は、東日本大震災での未曾有の大惨事から、東北地方の地域医療を支えることを使命として開設されました。また、東北医科薬科大学はご存知のように新設医科大学であり、本年4月で医学部生の最高学年が4学年となります。したがって、必然的に卒業生が出るまでは医師のマンパワーが不足しています。そのため、皮膚科医がやや飽和している首都圏から、皮膚科医としての医療を補填する必要のある地域へ異動したことになります。赴任後半年が過ぎて、現在は落ち着いた医療現場となっています。

そうした経緯で痛感したことは、皮膚科という診療科の医療全体からみた存在意義でした。すなわち、医療の現場で求められている皮膚科の立ち位置がよくわかったということです。ともすればマイナーな診療科として軽視されがちですが、多くの皮膚科患者さんがおられ、他の診療科の先生方も皮膚科の専門性を認識しています。皮膚は目にみえる臓器であり、現行の医療のトレンドともいえる早期発見・早期治療を行うにあたって、皮膚科が求められている立場の重要性を痛感しました。そして、もっともニーズのある領域は皮膚癌でした。そうです、手術の技術です。かつて研修医時代に培っていた外科の手技が、この年齢で生きてくるとは思いませんでした。いまは週に1回、手術室を使用して、全身麻酔はもちろん、全層植皮、分層植皮も当たり前に行っています。専門ではない皮膚外科がなんとか熟せているのも、かつて指導していただいた諸先輩方のお蔭かと存じます。この場をお借りして御礼を申し上げます。

総論的には、他の診療科の先生方とのチームプレーが医療に極めて重要であることを認識しました。幸い、これまでさまざまな診療施設で研修を積んで参りました。さまざまな診療施設で研鑽を積んだことを、かつては引け目に感じていたこともありました。しかし、東北医科薬科大学に赴任してからは、この経験が役立っております。皮膚科学会の特定の交流のみでは、ともすれば“井の中の蛙、大海を知らず”に陥りやすいと感じます。

仙台はもとより、留学したアメリカ合衆国を除いては、これまで首都圏を離れて生活したことがありません。とくに、仙台にお住まいの先生方や東北にゆかりのある先生方がおられましたら、御連絡いただけると嬉しいです。病診連携の構築を進めて参りたいと考えておりますので、宜しく願い申し上げます。

川上 民裕

(東北医科薬科大学皮膚科学教室主任教授)